

第5章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 福岡

- 平成 17 年度 福岡県新生活運動協議会研究大会 -

1. シンポジウムの概要

テ ー マ：子どもと一緒に考える新生活運動

日 時：平成 17 年 12 月 2 日（金）13：00～16：40

場 所：アクロス福岡

参加人数：80 人

開催目的：大人たちは今、子育てをどう考えているのか？就学前の子ども達と親に対して「食」「睡眠」「遊び」「おじさん・おばさん」をテーマにとったアンケート結果を基に「子どもと一緒に考える」ワークショップを開催する。その結果を踏まえて、生活学校・生活会議が具体的に「わたしは何をするのか？」「あなたは何かできるのか？」を問いかけるとともに、他団体との交流を深めて、連携し、運動への参加を呼びかけたい。

タイムスケジュール：

13：00 開会

13：10 基調講演 「人間はなぜ自然にひかれるか」
講師：宇根 豊（農と自然の研究所代表）

14：10 アンケート報告・問題提起・ワークショップ
コーディネーター
山形 紀子（西日本新聞社論説委員）
助言者
高岡 完治（あしたの日本を創る協会理事長）
宇根 豊（農と自然の研究所代表）
荒瀬 泰子（福岡市こども未来局局長）
安立 清史（九州大学大学院人間環境学研究科助教授）

16：40 閉会

2. 基調講演の主な内容

「農と自然の研究所」所長の宇根豊さんに、「人間はなぜ自然にひかれるのか」というテーマで講演していただいた。以下は、その主な内容である。

自然と眠くなるという場合の「自然」と、自然にひかれるという場合の「自然」は、全く意味が異なる。自然環境というと、人間の力の及ばないもの、人間とは別世界のものと考えられるが、そうではない。

魚や生き物がたくさんいる川よりも、生き物が全くいない川のほうが好きだという子どもがいるが、親たちが、ハエ・蚊あるいはゴキブリのいない生活環境を求めてきた結果である。にもかかわらず、子どもに自然や生き物を大事にするように言うことは子どもにとっては大変なストレスかもしれない。しかし、魚や生き物は気持ち悪いという子ども、ひとたび実際に田んぼに入って昆虫を捕まえたり、川で魚を取ったりするとそのような壁は難なく越えられる。親たちがそういう経験は大事だと考えていても、もっと他のもの例えば勉強などに重

点を置いてしまう結果である。

また、子どもたちに昔ながらの手植えによる田植えの体験をさせると、ぬるぬるとした感触の中で多くの生き物を感じることができる。同時に、何百年にも及び百姓がもとの土壌を改良しようとしてきた作業の結果、もともとあった自然よりもっと豊かになった自然を感じることもできる。残念ながら効率重視の現在の産業としての農業は、手作業の田植えはもとより、農家の子どもにさえ農業の体験をできなくさせている。



時間について考えてみると、時間を大切にすゝる学問・伝統・政策というものがなゝい。自然に対して、この無駄といわれゝる時間をなくしてしまふと、自分の中の、生き物を殺したくないという配慮、情念が失われゝてしまふ。社会全体が経済や生産の効率を重視し、自然を感じたり、生き物を大事にしたりするたゝめの時間を無駄だとする考えに、すべての生き物には命や魂があるのだ、無駄な殺生はしないという人間の情感が負けてゐる。また、昆虫には、害虫と益虫と、そのどちらでもない虫がゐる。このどちらでもない虫は「ただの虫」と呼ばれる。生物多様性という言葉がよく使われゝる。これはただの虫もゐてよいという程度の意味である。この生物多様性という概念は、生物にはすべて命と魂があるから大切にしなければならぬという日本人が伝統的にもつ情感により受け入れられた。この、ただの虫、ただの時間を大切にすゝるといふ考えを大人が持たなければならぬ。

クーラーの風と自然の風では、自然の風のほうがかゝ持ちがよい。ボタン一つで出てくる風と違ひ、自然の風は人間の力ではどうしようもない。どうしようもないので自然の風に身を委ねる。この身を委ねるといふことが、おれがおれがといふ欲望を捨て去ることである。同じような状況は、自分たち百姓が仕事の合間に風景を見ることにもあてはまる。風景は生き物で満たされておゝり、自分も生き物に帰って風景に包まれる。風景に包まれることで、自分の欲望を失くしていく。この状況がかゝ持ちいい。現代人には、このような時間が必要である。なぜ人間が自然にひかれゝるのといふことは、もっと語られゝる必要がある。

人間の欲望の結果、自然が荒れてきてゐる。私たちは自分の利益をある程度失つてでも、自然を残そうとしていかなければならぬ。自然を支えてゐる百姓を、消費である県民、国民が支えゝる必要がある。それは、地元で採れゝるものを、地元の人が食べるといふことだ。ご飯を食べるといふことは、稲を育てるといふことだ。稲を育てるといふことは、稲の周りの昆虫やあらゆる自然を育てるといふことだ。

3. アンケート報告

福岡県新生活運動協議会は、2005年度の調査として、アンケート調査（回答者数：163人）と聞き取り調査（171人）の2種類を実施した。その結果を、「はかた夢松原の会」専務理事の須本恭雄さんが報告した。以下では、その主な内容を紹介する（図表に関しては、付録の福岡県シンポジウム資料を参照のこと）。

アンケート回答者が1名をのぞき、保護者である母親だったので、ここでは30代の母親にスポットを当てる。

まず、幼稚園・保育園までの通学に関することだが、幼稚園・保育園から10分以内に住んでゐる方で、仕事をされてゐない方のほとんどが送迎バスを利用されてゐた。一部、自家用車が使われてゐる。反対に、仕事をされてゐる方は自家用車を通学に利用されてゐる。近所を歩きながら、また近所の方と触れ合いながら、といふことはほとんど無いようである。

これは、5分以内の通学時間の方も同じような結果がでた。こうした結果を踏まえると、最近のお子さんはなかなか歩かないのかなと思う。

親子が出かけることに関しては、公園や広場、商業施設が多い。イメージとしては、やはり手を引いて歩いているというように、お子さんと密接な関係にあることが良く分かる。ただし、別のアンケートの項目では、その公園や広場に改善の余地があるという結果が出ている。例としては、公園内で遊べないとか、遊具が壊れているとか、犬のフンが落ちていて遊べないとかである。

子どもたちが参加して楽しい行事については、幼稚園・保育園では運動会だ。子どもたち自身が一番嬉しかったこととして挙げているのは、自分たちが住んでいる地域以外のところに出かけることである。もちろん、車や電車での移動になる。自分たちだけで楽しんで帰っているのではないかと思ったが、やはり運動会のように手を引いて出かけているなという感想を得た。

次に、子どもの就寝時間についてであるが、仕事をされている方とされていない方とで30分近い差がでた。平均すると9時10分位に寝ているという結果になった。仕事をされていない方の子どもは、9時～10時に寝ている子どもが多く、仕事をされている方の子どもは、10時～11時の間に寝ている子どもが多い。データの中での計算なのでそれほど気にかける必要はないと思うが、傾向として仕事を持たれている保護者の方が、子どもの就寝時間は遅くなりがちなのである。

子どもの遊び時間のことで集計をとると、64%が屋内で過ごしているという結果になった。子ども2～3人で遊んでいるのが最も多い。好きな遊びのランキング1位は、ごっこ遊びだった。ところが、親は、外で遊ばせたいという意見がもっとも多くでており、出来るだけ多くの子どもたちと、外で駆け回って欲しいという意見がみられた。これが、子どもと、その保護者との遊びの差を表しているものである。実際に、おにごっこ、かくれんぼ、缶けりなど外で遊ぶことについては、親御さんたちの子ども時代のほうが、圧倒的に長い時間であったことがわかる。子どもさんの成長や、環境の違いもあるので、一概に言えないが、こうした思いが子どもさんを公園などに連れて行っている要因の一つかと思った。

「近所に信頼できるおじさんやおばさんがどれだけいますか」という質問に対しては、「子どもの友達の親」という答えが多かった。子どもの友だちの親をいれるのは当然であるし、いわゆる「近所のおじさん・おばさん」と答えた方もいたが、「いない」という回答も13%あった。子どもの親ということであるから、親御さん同士も同世代の方が多く、第三者的なつながりは薄いように思われた。

最後に、保護者の意見では、「情報が欲しい」というものが多かった。これは、情報が少ないということもあるし、自分にとってどれが必要な情報であるか、言葉を変えれば、どういうサービスを受けられるか、という意味での情報にウエイトが置かれていると思った。

課題としては、公園・広場などの改善、公民館などでの意見の交換や情報の共有があげられていた。地域でこのようなことが、スムーズにおこなえる仕組みがあれば良いと思う。

4. グループ・ワークに向けた問題提起

アンケート結果報告を受け、また次のグループワークに先立ち、九州大学の安立清史先生から問題提起がなされた。問題提起は、「縦の関係」、「横の関係」、「斜めの関係」の三角形の人間関係に関することであった。主な内容は次の通りである。

縦の関係というのは、上下関係になる。親子関係、先生と生徒との関係、上司と部下との関係などである。これは社会のいたる所にある。次の横の関係は、友達との関係、仲間との関係などであるが、これもいたる所にある。ところが、斜めの関係、この斜めの関係とはどういうものを指すかと言うと、少し意義のある関係というか、隣近所のおじさんやおばさんとの関係である。昔は社会の掟というルールを教えてもらうことがよくあった。縦、横からだけでなく斜めからの関係でいろいろなことを学んだ。

少し具体例を挙げてみたい。宇根先生のお話の中で、田んぼに入れない農家の小学生の子どものことがでてきたが、昔は縦の関係である親子の間で、また横の関係である友だちとの間で田んぼに入る経験をすることが多かったと思う。もしも、それが無くても斜めの関係にあたる人から教えてもらうことがあったものである。

ところが、先のアンケート結果によると、斜めの関係というものがほとんど無いように思う。また、縦、横の関係を示す辺も短くなり、三角形も書けなくなっている。斜めの関係はもっとひどくなっている。だから、ちょっとしたことで悩んでしまう、落ち込んでしまう、どうしたらいいのかわからなくなってしまう、こういう状況にあるのではないか。

そして、この前提に立って考えていただきたいのは、この新生活運動の研究大会に来ている皆さんこそが、今の世の中から無くなりつつある斜めの関係をもう一度作る、いや作らねばならないのではないかということである。おじさん、おばさんという言葉があったが、次世代を担う子どもと斜めの関係から繋がっていかうとするということが、私の問題提起だ。そのためにも、まず皆さんに斜めの関係がいかに大事かということ、考えていただきたい。親から教えてもらえないこと、友だちから学べないことなど、本当はたくさんあるのではないか。

また、斜めの関係が作られる場所も大事である。偶然の出会いや一回限りの出会いで斜めの関係が出来るわけではない。地域のつながりの中でできるものだと思う。公式のかたい行事の中だけでなく、料理や遊びを通じて出来るものだと思う。斜めの関係とはどういうものなのか、どう作ればいいのか、どこで作るものなのかということ、意識されながら今日の討議をしていただけたらよいと思う。

5. グループ討議発表とコメントの主な内容

(1) グループ討議発表

グループ討議は、「食」「睡眠」「遊び」「おじさん・おばさん」の4テーマに別れてワークショップを行った。それぞれのグループで話された内容を、最後に全体で発表した。その主な内容を紹介する。



テーマ：「食」

現在は、親子の縦の関係が築きにくい状態にある。その中でどう「食」を捉えていくかということ、話を合った。料理のノウハウを伝える機会では、公民館や行政に頼って待ってい

るだけでなく、出前講座を行なうなどして、逆にこちらから積極的に関係を持っていこうとするべきだという意見がでた。また、食材の選び方に関しては、現在は手軽にどこでも買うことが出来るため、家庭料理をきちっと作るという点で、食材選びが上手くいっているとはいえないという意見がでた。結論は、「食」を大切に、また「食」を通じて交流を図れる場を作るということだった。



テーマ：「睡眠」

現在はテレビやゲームなど睡眠を削りたくなる余暇が多くある。また、最近は、子どもが外で汗を流して遊ぶ環境が減り、自然とふれあうことも難しくなっている。こうしたことが睡眠を取りにくくしている一因だと思う。睡眠と食事は生きていくうえでとても重要な要素であり、幼児期の睡眠は親の躰の範疇にはいる。ここを怠ってしまうと成長してから、わがままになったり、朝起きられず不登校の一因になったりすることもあると思う。

テーマ：「遊び」

遊びに関しては、二つのグループにおいて、話し合われた。

ひとつめのグループでは、子どもがどのような遊びをしているかという現状について話し合いを始めたという。外で遊んでいる子どもはボール遊びや自転車遊びが多い。また、家の中では漫画を読んだり、テレビゲームをして遊んだりというように1人遊びの子が多い。子どもたちは、遊び仲間を塾の子どもに求めているのではないかという意見もだされた。そこで、子どもたちを地域に、外に引っ張り出すにはどうしたらよいか、どのような場があるのかという話になった。子どもが一年中遊べる空間は公園である。しかし、現在の公園では、行政による規制が多くあり、子どもたちが自由に遊べない現状がある。そこで、私たちは大人の目が届く広場を作るために何かアクションを起こすこと、それが子どもたち、保護者たちに出来ることではないか。

ふたつめのグループでは、自分達が子どもの頃にどのような遊びをしていたかということから話し合いを始めた。はないちもんめ・ケンケンパー・かくれんぼ・缶けり・ゴムトビ・馬とびなど、道具を使わなくて広場だけで遊べる、遊びをしていた。そこで、その時代にもう一度取り戻せないかということ話をした。昔は自然の中で遊んでいたが、今はその自然も作られ、見る自然になっており、遊ぶ自然ではなくなっている。いかにすれば子どもたちが自然と遊ぶようになるかを考え、行動するのが大事だということになった。

テーマ：「おじさん・おばさん」

「おじさん・おばさん」のテーマも、2つのグループで話し合われた。

ひとつめのグループは、「おじさん・おばさん」をイメージするものから話し合いをはじめたという。「懐かしい」、「親しみやすい」という良いものがあつた一方で、「今お付き合い



することはない」、「どこにいるか分からない」といったものもあつた。個別的にみると「おじさん」は、「ださい」、「声がでかい」など、悪いイメージの方が多。一方、「おばさん」は地域に大勢いるせいか、良いイメージの方が多。昔からいろいろな世話をしていたり、挨拶をしたり、また山菜とりを教えてくれたりなど、今も昔もそれ

ほど変わらず良いイメージのようだ。では、おじさんはどうすればよいのか。自分から積極的に地域に溶け込んでいくことが必要である。そして、おじさん・おばさんともに、地域の中で自分が持っている技や能力、挨拶でもよいが、それを積極的に発揮して、地域の中での役割を十分にこなしていくことが必要である。

二つめのグループは、それぞれが子どもにどのように関わっているかということから話しはじめたという。通学路に立って交通指導をしたり挨拶したりする、また幼児を連れた母親と公園などで話しをする、老人会で何ができるか話し合いをおこなうなど、それぞれが少しずつでも子どもに関わっていることが分かった。それが、斜めの関係にどう繋がるかを話し合っているうちに、小学校でボランティアをしている方の話がでた。その内容は、小学生を連れて老人ホームを訪ねていき交流をはかるといったものだった。子どもは、帰宅して今日のホームでの様子を語ったりすることで、親との交流もはかれるという。また、出前講座を通じて、ものを大切にする活動をされている方もいた。こうした活動を通じて斜めの関係が作れるのではないかと思う。結論として、積極的に私たちのほうから関わっていくことで、斜めの関係ができるのではないかということになった。働いているお母さんのために自分自身で考えて行動するべきだという結論になった。

(2) 助言者によるコメント

グループワークの発表を受け、助言者からは次のような発言があった。

山形さんからは、親子関係において情緒的な交流が乏しい場合、第三者が斜めの関係を通して関わっていくことが重要であることが話された。そして、重要なこととして、今日の意見を地域に持って帰って、いかにして地域に根ざしていくかということを実際に検討することをあげられた。宇根さんは、失われつつある伝統・技・知恵を次の世代に引き継いでいくためには、団塊の世代が地域で頑張り、存在感をだしていくことが必要であると話し、そのためには、団塊の世代は戦後一貫して推し進めてきた生産・経済重視の見方を変えていかなければならないことを強調された。安立先生からは、昔はあったが、今はなくなってしまっている親子でもない、友だち・仲間でもない社会や人間との関係、斜めの人間関係が重要であり、必要であることが語られた。そして、この斜めの関係をもう一度築くためには、斜めの関係のイメージを持って暮らしていくことで、日常的に様々な場面で対応できることがでてくるのではないかと提案された。

高岡理事長からは、高齢者も子ども達も外に出ていくためには、幼稚園や保育園を利用し、子ども達と仲良くなっていくと良いと思うと語られた。そして、様々な世代が集まり、それぞれの世代がそれぞれの役割を果たしていくことでできあがる「群れ」を地域に取り戻すことが大事であると主張された。また、人間の五感・六感を養うために、子どものときに自然と触れ合うことの重要性を話された。

6. シンポジウムの感想

コーディネーターである西日本新聞社論説委員の山形紀子さんが研究大会全体を振り返り、次のような感想を寄せてくださった。



世界に類をみないスピードで進む我が国の少子高齢社会に、私たちはどう向き合えば良いのだろうか。今回の「福岡県新生活運動協議会研究大会」は、現代社会の命題ともいえる「子育て支援」をテーマに活発な討議がなされた。

第一部は、農業普及員の宇根豊さんを講師に招き、足元から環境問題を見つめ直すことの重要性を痛感させられた。

続く第二部では、会議の開催前に、子育て中の母親を対象に行った聞き取り調査の結果が報告された。調査結果では、公民館などの公共施設について「使い勝手が悪い」「役立つ情報が少ない」などの要望が出された。さらに、近隣関係が希薄化する社会にあって、若い母親たちが相談する相手を見いだせずに社会から孤立しがちになっている現状が垣間見られた。この調査結果を踏まえ、「おじさん、おばさん」「睡眠」などの四つの分科会で行われたワークショップでは、地域で地道な活動を行っている生活学校・生活会議のメンバー一人ひとりの経験が存分に活かされたように思う。引いては「自分たちに何ができるのか」を、自ら問い掛けた会議ともなったようだ。

少子化に歯止めがかからなければ、経済や社会保障など日本の社会システムが維持できなくなる。国は「超少子国」への危機感から、次々と子育て支援策を打ち出している。だが特効薬とはなり得ていない。掛け声だけで少子化に歯止めがかかる訳ではないからだ。

その意味からも、今回の研修会で「斜めの関係を築こう」と提唱された意義は大きい。地域共同体が失われつつある時だからこそ、家族とは距離を置く人たちが潤滑油となっていくことが重要な意味を持つに違いない。

今後は、いかに若い世代を巻き込んだ活動を展開できるかが課題となるだろう。混沌とした時代の要請に応えるためにも、多角的な活動が要求されることは言うまでもない。

(井上嘉人：福岡県新生活運動協議会事務局)